

### 1. スウェーデン国王より、スウェーデン王立理工学アカデミーからの記念品伝達さる。



かねてから、スウェーデン王立理工学アカデミーより、当アカデミー設立の祝いとして、記念品を贈りたいとの意向が示されていた。この度、スウェーデン国王カール六世グスタフが、“Scandinavian Today”の文化祭に御出席のため来日された。この機会にということで、去る11月3日、スウェーデン大使館において、国王御臨席のもとに、その記念品の贈呈式が催された。それには当アカデミーより、小林会長、向坊、中川両副会長をはじめ、十余名の

理事、会員諸氏が招待された。

式次第としては、まず、スウェーデン大使 Heyman 氏、および、スウェーデン王立理工学アカデミー会長 Gustavsson 博士より御あいさつがあり、次いで、同アカデミーの名誉会長でもあられる国王より、記念品が直接、小林会長に授与された。(写真参照)。次いで小林会長より丁重な謝辞が述べられた。

この記念品は、地球儀を模し、世界平和を象徴した彫刻品で、スウェーデンの著名な彫刻家の手になるもののレプリカとのこと。そのオリジナルはスウェーデン・アカデミーの会議室に飾られており、このレプリカを、是非とも日本のアカデミーの会議室に置いて頂きたいとの希望であった。こうすることにより、両アカデミーの協力関係の強化の資としたいとの御意向である。

なお続いて、サントリー社長佐治敬三氏にたいするアカデミー会員証の伝達も併せ行われた。

次いでビュッフェ・パーティに移り、国王を囲んで、極めて和やかな懇談の場が持たれた。

なお上述の記念品は、当アカデミー事務局の会議テーブルの上に飾って有るので、おついでに折りには是非ご覧願いたい。

### 2. 昭和63年年賀詞交歓会

昭和63年の新春を迎え、1月20日(水)虎ノ門パストラル(農林年金会館)において本アカデミーの第1回年賀詞交歓会が催された。

参加者は90名を越え、先づ小林会長の新年のあいさつと乾杯により始められ盛会裡に終了した。





### 3. 日本工学アカデミー講演会

昭和62年11月10日  
於 東京大学

スウェーデン王立理工学アカデミーの会長、副会長ほか数名の主だった方々が来日されたのを機会に、昨年11月、日本、スウェーデン両アカデミーによる懇談会、講演会、懇親会がが次のように開催された。

開催日 昭和62年11月10日

1) 懇談会 14時-15時 東京大学工学部長室



スウェーデン側から、Dr. Sten Gustafsson (会長)、Dr. Alf Akerman (副会長)、Prof. Gunner Brodin (副会長)、Dr. Ragner Ohlson (副会長)、Mr. Ulf Sundberg (工業評議会委員長)、Dr. Bengt Modeer (秘書)、日本側から、小林宏治会長、中川一郎副会長、石原智男、乾崇男、猪瀬博、植之原道行、堀幸夫、米田幸夫、武田行松の各理事および中原恒夫会員らが出席、東大吉川評議員のあいさつの後、両アカデミーの現状、問題点等について、和気あいあいの中に話し合った。スウェーデンのアカデミーは1919年の創立で、工学関係のアカデミーでは世界でも最も歴史の古いもの由。年間の会合開催数約800、年間予算約450万ドルで、この中1/2弱は政府および産業界から、残りの1/2強はアカデミー自身の各種事業によることであった。懇談会の間、同行のスウェーデン側の御夫人方は東大のキャンパスを散策された。

2) 講演会 15時-17時 東京大学工学部  
11号館講堂

約50名の会員ならびに上記懇談会の出席者、御夫人方が出席、盛会裡に次の2題の講演が行われた。

a) Prof. Gunner Brodin (スウェーデン理工学アカデミー副会長)

「Evaluation of Engineering Education and its Influence on Industrial Development」



オーバーヘッドプロジェクタを用いながら、大学における工業教育の質を評価することは可能か、また工業教育の質は産業界におけるR&Dにどのように影響するか等の問題提起がなされた。結論として、これらの評価は極めて困難である、しかしもし質の概念を部分部分にブレークダウンするならば、相対評価としていくらかの重要な評価が可能であろう、またその結果を教育システムの重要な部分に用いて質を向上させることも可能であろうとのことであった。そして経験によれば、教授達をそのような評価のプロセスに参加させ、興味をもたせることによってのみ工業教育の質を向上させることができるとのことであった。(文責 堀 幸夫理事)

b) 猪瀬博教授 (日本工学アカデミー理事)

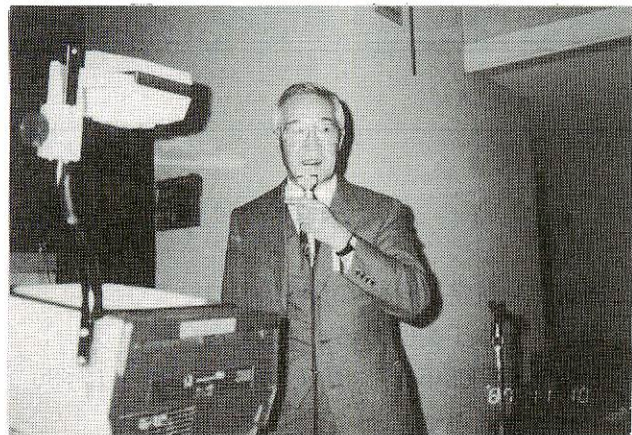
「日本における科学技術の振興について」

科学技術振興の面で、日本が直面しているいくつかの課題について私見を申し述べたい。

第1は産業構造の調整である。現在の大きな貿易不均衡を是正する上で、科学技術のもつ大きな力を全面的に活用すべきである。輸出額を抑制するためには、高度の研究開発によって他の追随を許さぬ製品を生み、従来の薄利多売か



ら、厚利少売への転換が必要である。輸入額を拡大するためには、食糧の大量備蓄技術の開発、レアメタルなど稀少高額な原料を用いた高付加価値製品の創出などが有効であろう。



第2は基礎研究の推進である。戦後の荒廃から立上る上で、経済復興が優先してきたために、日本はあまりにも経済性、効率性、有用性を追求しすぎたきらいがある。真の基礎研究の推進にあたっては、この種の意識からの解放がまず必要であり、人類の知的欲求の拡大へ向けて応分の寄与をするという、学問尊重の気風の再確立が不可欠である。日本人は直観性、情緒性に富んでいるが、その特質を更に育成すれば、基礎研究の面でも大いに独創性を発揮できるようになるであろう。

第3は科学技術における研究者や情報の国際的流通の促進である。最近ではシンメトリカル・アクセスなどの概念が登場して、日本の科学技術へのアクセスの改善を求める声が高まっているが、外国の研究者に対する日本語教育を日本の手により地球的規模で展開するなど、応分の努力が必要である。それと同時に、安全保障、知的所有権の保護などを理由とする、科学技術面での研究者や情報の交流を規制する動きに対しては、学問の自由を守る毅然たる姿勢で対処することが望まれる。

第4に国際的な視野を更に開放してゆくことが必要である。最近では米国の国内事情もからんで、科学技術のように地球的規模での長期的課題を、日米二国間で短期的視野で解決しようとする動きが顕著である。日米両国は、“濃きこと密のごとき” 小人の交りを回避し、“淡きこと水のごとき” 君子の交りを確立すると共に、欧州をはじめ世界の国々への配慮を忘れず、大局的見地に立ち、多国間交渉を通じて、地球的規模の懸案解決にあたるべきである。

### 3) 懇親会 17時-19時 学士会館分館 (東大赤門隣)

日本、スウェーデン両アカデミー会員による懇親会が、講演会出席者その他多数の参加を得て和やかに行われた。

---

## 4. 理事会だより

---

前号では、第3回までの理事会審議事項を掲載したが、今回は第4回(11月18日(水))、第5回(1月20日(水))理事会について取りまとめお知らせする。

第5回理事会の始め、昨年12月、亡くなられた川崎副会長の御冥福を祈って黙禱を捧げた。

### 議事

#### 1. 昭和62年度定期総会について

当初の予定5月19日(水)を諸搬の状況から5月30日(月)とし、特別講演を追加することとした。(第5回)

#### 2. 臨時総会について

本年度も関西に於て開催することとし、10月13日(水)京都開催を予定することとした。(第4回)

#### 3. 科学技術における国際協調と競争 — 日本工学会アカデミー国際シンポジウム —

日米欧科学技術鼎談シンポジウムを改称し、4月12日(火)、13日(水)に開催する。

#### 4. 談話サロン

12月9日(水)機械振興会館で第1回、2月16日(火)健保会館で開催することとした。(6頁参照)(第4回、5回)



5. 各委員会・専門部会報告  
 それぞれ活動報告がなされた。(第4回, 5回)
6. 日本工学会との連絡会  
 11月16日(日)開催され, 定期的に連絡会を持つことになったことが内容とともに報告された。(第

- 4回)
7. ニュース第2号の配布について  
 11月1日付で発行することが報告され「会員の声」欄を新設することとなった。(第4回)

## 5. 委員会・専門部会報告

### 5-1 政策委員会

委員長 向 坊 隆

政策委員会では, 我が国における科学技術政策に関する見解をまとめることを目指して活動計画を立案している。この度, その第一段階として, 会員に「科学技術行政の現状について」御認識いただく機会を供することとし, 下記の特別講演会の開催を企画した。定期総会の行事に合わせて時間帯をとったので, 多数会員のご参加をお願いしたい。なお, 一題目, 講演30分, 質疑10分を予定している。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* —

特別講演会 —————>

演題: 「科学技術行政の現状について」  
 場所: 日本工業倶楽部(定期総会会場)  
 日時: 昭和63年5月30日(月) 15:00~17:30

特別講演次第 司会 内田理事

開会挨拶 向坊副会長	15:00~15:10
(1) 科学技術庁事務次官	
内田勇夫氏	15:10~15:50
(2) 通商産業省工業技術院長	
飯塚章三氏	15:50~16:30
(3) 文部省学術国際局長	
植木 浩氏	16:30~17:10
閉会挨拶 石原理事	

以上

### 5-2 国際委員会

委員長 猪 瀬 博

本委員会は引続き, 日本学術振興会の「先端技術と国際環境」第149委員会と連携しつつ, シンメトリカル・アクセス, 発展途上国と先端科学技術, 知能ロボット技術の三課題について, 作業グループを設けて調査研究を行っている。シンメトリカル・アクセスについては, 3月31日および4月1日にハワイ大学イースト・ウエスト・センターで合同作業グループ会合が開催される予定である。

本委員会はまた, 4月12日および13日に本アカデミー主催, 新技術開発財団協賛により開催予定の日本工学会アカデミー国際シンポジウム「科学技術における国際協調と競争」の準備活動を行い, キーノート・スピーカーとしてPierre Aigrain(元フランス研究大臣), Walter Engl(アーヘン工大教授), John Pierce(スタンフォード大名誉教授), Ian

Ross(AT&Tベル研究所社長)およびSigvard Tomney(スウェーデン王立アカデミー副会長)各氏の出席を取付けることができた。また4月12日には, 岡村総吾会員をリーダーとして「日本における基礎研究の強化, および児玉文雄教授をリーダーとして「日本の科学技術へのアクセスの改善」に関するパネル討論を行い, 4月13日には, 唐津 一会員を座長として「知的所有権の保護」, 中原恒雄会員を座長として「知能ロボット技術」に関するオープン・フォーラムを実施することを, 関係委員会と協同して策定した。この国際シンポジウムの実施は, 向坊 隆会員を委員長とする組織委員会に引継がれることになっている。

### 5-3 材料専門部会

部会長 齋藤進六

現代は、新産業革命の黎明期といわれるような変貌を遂げつつあり、それは新しい科学技術の誕生と全地球的産業構造の変革との相互作用のもとに進行しているとみられる。

昭和62年8月28日に出された科学技術会議諮問第14号答申「物質・材料系科学技術に関する研究開発基本計画」は、本会員の多くの方々が参画された。

それには、

- (1) 物質・材料系科学技術は経済の発展に寄与、他の科学技術分野進展の基盤、21世紀の人類社会発展への技術革新の原動力、
- (2) 物理学・化学・生物学等の学問の進展や研究手段の著しい発展につれて、物質・材料を原子・分

子レベルで制御可能、既存の物質・材料についても精緻な加工技術の進展により、従来にない高度機能発揮が可能、

- (3) 基礎的シーズ創出の源泉・基礎研究重視、
- (4) 創製された新物質・材料の利用技術、既存材料の高度化、などの方向、基礎的研究の強化と国際社会への積極的貢献が示されています。

こうした事柄の推進に役立つ活動を行って行き度いと考えております。

行事としては、62年11月16日京都賞受賞者M・コーエンMIT教授講演会を学会と共催、63年3月9～11日新材料創製討論会「組織の超微細と界面制御」の後援を行いました。

援

### 5-4 情報専門部会

部会長 瀧保夫

63年2月3日専門部会を開催し、情報分野の立場から、①今後の技術開発の方向、②工学の発展を助成する施策等について提言、建議を行うことを目的として、次の活動方針を確認した。

- (1) 会員相互の意見交換を図る。年に1～2回部会を開催する。
  - (2) 対外活動としては公開討論会、講演会等を開催する。
  - (3) 部会の運営は、学会電子通信工学研連および情報工学研連の活動と出来る限り重疊させる。
- 情報専門部会の68年度活動計画として、63年11月頃、「工学教育について(仮題)」のシンポジウムを開催することを検討することにした。

また、専門委員会から提案があった次の2件については、63年度日本工学アカデミーの活動計画として提案することとした。

- (1) 国際シンポジウム「科学技術における国際協調と競争」の一環として、「知的所有権」に関するフォーラムを開催する。
- (2) 日本工学アカデミー臨時総会に合わせてその発足を記念して「創造性開発とわが国における教育研究環境」についての公開討論会を開催する。

上記(1)については国際シンポジウム組織委員会に提案し、唐津一会員を座長としてオープンフォーラムを実施することを関連委員会と共同して策定した。

### 5-5 バイオ専門部会

部会長 福井三郎

- 1) 日本-フィンランド協力シンポジウム「バイオプロセスにおける自動化と知能化」(昭和63年3月10～11日、理化学研究所にて開催)。本シンポジウムについて工学アカデミーの協賛の要望がなされた。
- 2) 1988年度開催予定のバイオテクノロジー関連の国際会議、シンポジウムについて情報の収集、動向の調査を行うこととした。
- 3) 我国において開催されるバイオ関連の国際集会

又は二国間の協力セミナーなどについて本部会からの支援の仕方を具体的に検討することとした。とくに1989年第10回酵素工学国際会議(1989年10月、三重県賢島)の協賛、支援について米国工学財団と相談することとした。

- 4) 本部会の専門委員を数名委嘱し、分担して上記の国際集会、セミナーにおける研究動向の把握、データベースなどについて具体的な活動を行うこととした。



## 6. 談話サロン

多くの会員が、形式にとらわれず、気楽に参加し、自由に討論の出来る場を提供する、「談話サロン」を企画したところ仲々の好評で、第1回目を昨年12月9日(水)機械振興会館で、第2回を本年2月16日(火)健保会館で開催した。第1回は約30名、第2

回目は90数名の参加を得て盛会であり、この企画が時期を得たものであることがうかがえる。

但し、初めての企画なので、試みに下記の両先生に話題を提供し、取りまとめて頂いたので参考に供したい。

### 1) 英国工学アカデミーを訪ねて

副会長 中川 良一



昨年10月英国の学会に出かけた際に、小林会長の代理として工学アカデミー (Fellowship of Engineering) を表敬訪問して参りました。

10月15日午後2時に、ウェストミンスターの近くの小さいが格式のあるオフィスを訪問しました。

お会いしたのは副会長のバーロー卿、正副事務局長のオソラ氏とアトキンソン氏でした。発足は11年前の1976年ですが、王立科学者協会 (Royal Academy of Scientist) は1662年に発足しており、現在は対等の兄弟関係にあるとのことでした。

320余年前という日本では江戸時代の初期です。欧州では英国のニュートンが万有引力を発見しました。また、ボイルは気体の圧力と体積の関係について、ボイルの法則を発見しました。そのように自然科学が隆盛となりフランスにも科学アカデミーができた頃です。

エンジニアリングの方は大分遅れて1828年に土木建築が王室憲章 (Royal Charter) を受けその後機械、電気、化学、材料などが相ついで憲章を受けました。〔右図〕

1974年のオイルショックも含めて急激な学際的な技術の進歩発展はこのようならばばらではすまないということになりました。

このまとめ役を引受けられたのが女王の夫君、エジンバラ公でした。そのお力で1976年6月にパッ

キンガム宮殿でFellowship of Engineering が創立され活動が開始しました。王室憲章を受けたのは1983年とのことでした。

現在会員数は約700名で1,000人を越えないようにしている。その中約100人が科学アカデミーの会員を兼ねている。現在の会員の資格が狭く、経済学者、バイオロジスト、半導体学者などは入れていないので、今議論中であるとのことでした。

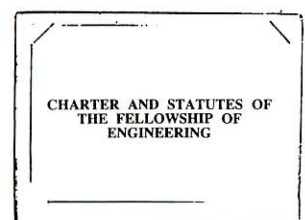
その任務は(1)政府への提案、(2)政府発行のペーパーのチェック、(3)調査のサポート、(4)他国工学アカデミーとの交流で特に米国のアカデミーとは頻繁との由であります。

予算ははじめは会員からののが主であったが、漸次企業からも受け、9年目から政府からも受けるようになった。最初から政府から受けると自主性がなくなると思うよとのことでありました。

我が国のアカデミーはできたばかりなので、よろしくといひ辞去しましたが、歴史の長い王立科学協会といい、それぞれのRoyal Charterといい、彼我の事情の差を感じずにはいられませんでした。

帰途につきながら、1973年ちょうどオイルショックの前年に、自動車技術者連合FISITAの大会でロンドンへきた時のことを思い出しました。その際エジンバラ公の特別講演があり、その博識と機智に満場を沸かし深い感銘を覚えました。公の力によって数年後にこの工学アカデミーができ上がったのは成程、と思った次第です。

† 英国工学アカデミーの王女による憲章と資格の表紙





## 2) 日本工学アカデミーと日本学術会議

日本学術会議会長 近藤次郎



英国のロイヤル・ソサエティ（王立協会）の会員は、フェローと呼ばれて学者としての最高の荣誉とされている。王立協会は1660年に創立された。当時はまだ産業革命以前であるが、ルネッサンスを経て、ようやく科学が神学に代わる真理として重視されてきた時である。我が国では5代将軍家綱の時代、華やかな文化の開化した元禄時代の直前で、町奴や旗本奴が活躍していたといわれる。

この時代に貴族や軍人や政治家とは別に、科学者が集まって社交と交遊の場として作ったのがロイヤル・ソサエティで、創設時の会員はまだ、100人に満たなかったそうである。その初期から有名な会誌「フィロソフィカル・トランザクション」を刊行している。会員は年60ポンドを納入する規定で、創立後100年程はこの会費さえ払えば誰でも入会ができたようである。

しかしながら、その後は次第に入会に厳しく制限を付け、現在は王室と外国人会員が80名で、正会員は1,000名程度、毎年40名ぐらいが交替するそうである。会員は終身で、その平均年齢は65才とこれは、日本学術会議より少し上である。

自然科学だけでなく、数学のほか、工学、医学などの分野で顕著な貢献をした学者が推薦される。英国は人口が6,000万、日本の半分であるが、ノーベル賞受賞者は63人で、日本人の5名に比べるとはるかに多い。これには上に述べたような長い伝統があるので、明治初期に西洋の科学を取り入れてからわずか100年あまりの我が国とは歴史が違う。

英国では、工学については別に独立の各種の学協会が存在しているが、上に述べたように技術者でもFRS（Fellow of Royal Society.）になる道が開かれている。

さて日本工学アカデミーは、会長始め理事各位のお骨折りによって、昨年ようやく発足した。現在は、会長の御厚意によっていろいろな援助を賜っているものの、主として会員の会費で運営されている。当分はこの状態が続くが、本会の独立性を維持するためにやむを得ないと思う。工学アカデミーがロイヤル・ソサエティのように世界的な権威のある組織となるためには、なお多くの歳月が必要であろう。しかしながら、我々は今から着実にその発展に努力をすべきである。

工学アカデミーでは、現在は会員の資格審査は比較的ゆるやかであるが、将来は次第に評価を厳しくして、アカデミーの会員になることが一代の名誉と認められるようになりたいものである。

日本学術会議には、5部として工学に関する部門があり、その他4部、6部、7部の中にも一部分工学に関係のあるものが存在する。しかしながら、学術会議では原則的に社会、人文、自然科学のすべての分野の合意による総会の審議を基本にしているため、特に工学に関する問題だけに専心するわけにはいかない。そこで工学分野に独自の問題については、工学アカデミーのような組織が必要である。

日本学術会議では、5部の定員がわずかに32名に限られている上に、その在任期も最大3期と決められたので、終身会員として留まることはできない。

さて、それでは工学アカデミーは、何をやるべきであろうか。

工学の振興について政府に勧告し、その成果を政策、産業、国民生活に反映させるのは、本来は学術会議の役割である。

高名な学者の行う仕事は、評価であると思う。英国では、ピア・レビューといって、同じ分野の専門家による評価が行われている。これは貴族制度から出たものであって、貴族を評価するものは貴族でなければならないというものである。このような役目は現在のところ学術会議が行うのは難しい。このようにして、工学アカデミーが、近い将来に真に優れた会員によって構成される日が近いことを期待するものである。

工学アカデミーは、日本学術会議と競合するものではなく補完する存在として、共に相補い相携えて発展して行くべきである。



## 7. 会員の声

会員 寺野寿郎(法政大学)

工学アカデミーの趣旨に共鳴して入会したものの、具体的に何をすればよいのか、さっぱり分からない、というのが本音である。多くの学協会がそれぞれの分野で活動しており、高い会費を払ってここで同じことを繰返すのでは意味がない。本アカデミーは個々の技術分野の問題よりも、もっと根本的な問題に取り組むべきではなかろうか。例えば、創造的技術育成の問題がある。日本人の創造能力は決して低くないと思うが、創造力の発揮を妨げる多くの社会的要因が介在することも事実である。若い頭脳を押

しつぶす受験戦争、学際活動を認めない学会の古い体質。人物評価哲学を特たない学歴社会。個性を排除する閉鎖的なシステム。これらは若い創造の芽を摘む強力な力である。その遠因は社会の構造や国民性に根差し、簡単に改善できるものではないが、少なくとも技術の世界からは除かなければ日本は永久に人真似しかできないことになる。本アカデミーが学界、産業界、官界などに有効な提言を行うことができれば、その意義は絶大だと思う。

### 第1回 定期通常総会開催通知

各位

日本工学アカデミー

来る5月30日(月)14時30分より東京都千代田区丸ノ内1-4-6 日本工業倶楽部において下記議題により、本会定期通常総会を開催いたします。

なお、正式通知は5月上旬お手許へ差し上げます。

- 議題
1. 昭和62年度事業報告
  2. 昭和62年度収支決算報告
  3. 昭和63年度事業計画および収支予算(案)
  4. 客員の推薦について

— \* — \* — \* — \* — \* —

総会后、特別講演を企画しております。

(4頁の政策委員会の項御参照)

### 編集後記

ニュース第3号をお届けいたします。

昨年10月、懸案の事務局もでき、お蔭様で本アカデミーの活動も、日を追って、軌道に乗って参りました。本号の内容は

- 昨年11月上旬の二度にわたるスウェーデン理工学アカデミーとの交歓
- 昨年12月と本年2月、好評裡に開かれた談話サロン

などです。また寺野寿郎会員から“会員の声”第1号を頂きました。今後とも会員の皆様のご投稿を期待しております。

最後に、昨年12月急逝されました故川崎京市副会長のご冥福をお祈り申し上げます。

(広報担当 今井・乾)

No. 3

1988年3月10日

日本工学アカデミー 広報委員会

事務所：〒104 東京都港区芝5-33-7  
(徳栄ビル 9F)

日本電気株式会社内

☎ (03) 798-6196

FAX (03) 798-6197

### お願い

1. 国際シンポジウム4月12日、13日に御参加下さい。
2. 定期総会、特別講演会に御参加下さい。
3. 只今お願いしています、会員カードをお忘れなく御記入御返送(3月25日迄)下さい。

(次号に談話サロンに頂いたご意見を取りまとめ掲載します)





### 川崎京市氏を悼む

理事 内田 盛也

日本工学アカデミー副会長川崎京市氏は、昭和62年12月12日、肺癌のため79歳で逝去されました。

つい先ごろまで、理事会に出席され、お元気に日本の学術と工学の進展のお話をされておられましたのに、この突然の訃報に接し、悲しい思いであります。

氏は明治41年にお生れになり、昭和7年東京工業大学を御卒業、近藤製薬工場（現協和醗酵工業株式会社）に御入社になりました。その後、協和醗酵工業株式会社常務取締役から、昭和32年に新設の国策会社、日本合成ゴム株式会社に常務取締役として移られ、揺卵期にあった日本の合成ゴムの技術開発を先導されると共に経営者として同社の基盤づくりに尽力されました。

昭和44年に同社社長、昭和50年会長、そして昭和56年相談役として、民営化された日本合成ゴム株式会社のみならず、日本の石油化学工業、高分子化学工業の育成、発展に尽力されてこられました。その業績は昭和46年藍授褒賞、昭和54年勲二等瑞宝章などの多くの御受勲や御受賞、更に日本化学品審議会、合成ゴム工業会、日本ゴム協会などの会長をはじめ各種政府機関、経済団体の重要な役職を歴任されたばかりでなく、有機合成化学協会、化学工学協会の会長をはじめ、数多くの学術団体の役職をも兼ねら

れて、科学技術の振興に心をくぐいでこられました。

こうした御経歴だけでなく、氏の最大の御業績は我々若い科学技術者、経営者に対して、学術の重要さと、それを経営に取り入れるための経営者の姿勢を、自らの人生の中で示してこられたことでした。あの温顔と誠実なお人柄に甘えて、私共後輩は、いつも氏の後姿を追いながら成長して参りました。

昭和48年暮、石油危機に直面して、若い技術経営者が、戦後の混乱を経済で再建しようとする思いから経済同友会が作られたように、科学技術による打開を目指して結集した高分子同友会の代表幹事を引き受けられ、以来10数年の間御指導頂きました。その間に、次世代産業基盤技術開発制度の推進、臨時行政改革審議会の科学技術制度の在り方への提言など、数多くの科学技術推進のための社会改革への活動がなされました。そのたびに、「この問題の実行はほとんど不可能に近い、しかし〔青の洞門〕の故事の如く、君達とやってみよう」との氏の姿勢が、私共に無から有を作り出す気力を与えてくれました。

日本工学アカデミーも、多くの方々の方々の努力によって誕生し、氏は化学の分野を代表して副会長となりましたが、全地球的変革期において、本アカデミーの果たすべき役割は非常に大きなものがあります。この時期に氏のような偉大な指導者を失う痛みは誠に大きなものがあります。これまでに学んだ氏の教えを体して、私共はいつまでも氏の理想を追って参りたいと思っております。

ここに氏の御遺徳を忍び、つつしんで御冥福をお祈り致します。